

44
06.11.03

日本国特許庁
JAPAN PATENT OFFICE

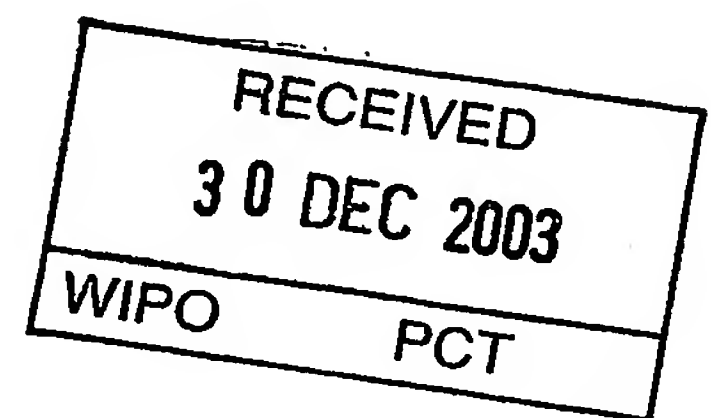
別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office.

出願年月日 2002年11月6日
Date of Application:

出願番号 特願2002-322722
Application Number:
[ST. 10/C]: [JP2002-322722]

出願人 キヤノン株式会社
Applicant(s):

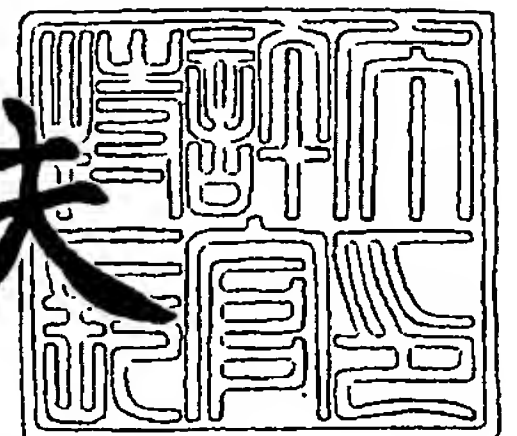


PRIORITY DOCUMENT
SUBMITTED OR TRANSMITTED IN
COMPLIANCE WITH
RULE 17.1(a) OR (b)

2003年12月11日

特許庁長官
Commissioner,
Japan Patent Office

今井康夫



【書類名】 特許願

【整理番号】 226597

【提出日】 平成14年11月 6日

【あて先】 特許庁長官 太田 信一郎 殿

【国際特許分類】 G09F 9/30

【発明の名称】 カラー液晶表示素子

【請求項の数】 1

【発明者】

【住所又は居所】 東京都大田区下丸子 3 丁目 3 0 番 2 号キャノン株式会社
内

【氏名】 浅尾 恭史

【発明者】

【住所又は居所】 東京都大田区下丸子 3 丁目 3 0 番 2 号キャノン株式会社
内

【氏名】 磯部 隆一郎

【特許出願人】

【識別番号】 000001007

【住所又は居所】 東京都大田区下丸子 3 丁目 3 0 番 2 号

【氏名又は名称】 キャノン株式会社

【代表者】 御手洗 富士夫

【電話番号】 03-3758-2111

【代理人】

【識別番号】 100090538

【住所又は居所】 東京都大田区下丸子 3 丁目 3 0 番 2 号キャノン株式会社
内

【弁理士】

【氏名又は名称】 西山 恵三

【電話番号】 03-3758-2111

【選任した代理人】

【識別番号】 100096965

【住所又は居所】 東京都大田区下丸子 3 丁目 3 0 番 2 号キャノン株式会
社内

【弁理士】

【氏名又は名称】 内尾 裕一

【電話番号】 03-3758-2111

【手数料の表示】

【予納台帳番号】 011224

【納付金額】 21,000円

【提出物件の目録】

【物件名】 明細書 1

【物件名】 図面 1

【物件名】 要約書 1

【包括委任状番号】 9908388

【プルーフの要否】 要

【書類名】 明細書

【発明の名称】 カラー液晶表示素子

【特許請求の範囲】

【請求項 1】 表面に電極を備えた一对の基板を対向配置し、該基板間に液晶層を有し、かつ該基板の外側に少なくとも 1 枚の偏光板を有した液晶表示素子であって、

該液晶表示素子の一つの画素は複数の副画素からなり、前記複数の副画素の少なくとも一つは、液晶層の配列変化によるリタデーション変化に応じたカラー表示を行う事ができる副画素 1 と、カラーフィルタ層を有した副画素 2 からなることを特徴とするカラー液晶表示素子。

【発明の詳細な説明】

【0 0 0 1】

【発明の属する技術分野】

本発明は高い透過率もしくは高い反射率を有する多色表示可能なカラー液晶表示素子に関するものである。

【0 0 0 2】

【従来の技術】

現在、液晶ディスプレイはパソコン用などの各種モニタ、携帯電話用表示素子などに広く普及しており、今後は大画面テレビ用途への展開を図るなどますます普及の一途をたどることが予測されている。そしてこれら液晶ディスプレイにおいてカラー表示方式として広く使用されているのが、マイクロカラーフィルタ方式と呼ばれるカラー表示方式である。

【0 0 0 3】

この方式はひとつの画素を少なくとも 3 つの副画素に分割し、それぞれに 3 原色の赤・緑・青のカラーフィルタを形成することによってフルカラー表示を行うものであり、高い色再現性能を容易に実現することができるというメリットがある。

【0 0 0 4】

それに対して、このカラー方式では透過率が $1/3$ になってしまうことから、

光利用効率が悪くなってしまうという点がデメリットである。

【 0 0 0 5 】

上記光利用効率の悪さは、バックライトを有する透過型液晶表示装置または半透過型液晶表示装置、もしくはフロントライトを有する反射型液晶表示装置の場合において、視認性を高めるべく明るい表示を実現しようとする、バックライトもしくはフロントライト輝度を高める必要があるために、消費電力が高くなるという問題がある。

【 0 0 0 6 】

また前記光利用効率の悪さは、フロントライトを用いない反射型液晶素子の場合にはより一層深刻な問題となる。つまり前記 R G B カラーフィルタを有する反射型カラー液晶表示素子は、非常に明るい屋外では十分な視認性を確保できるものの、その一方で暗い場所はもちろん、オフィスや家庭などの明るさの環境であっても十分な視認性を確保することが難しい。

【 0 0 0 7 】

一方、従来から、カラーフィルタを用いずに着色した表示を得るカラー液晶表示装置として、E C B 型（電界制御複屈折効果型）の液晶表示装置が知られている。この E C B 型液晶表示装置は、一对の基板間に液晶を挟持した液晶セルを挟んで、透過型の場合その表面側と裏面側とにそれぞれ偏光板を配置したものであり、反射型の場合には一方の基板にのみ偏光板を配置した一枚偏光板タイプ、もしくは両方の基板に偏光板を配置し偏光板の外側に反射板を設けた二枚偏光板タイプのものがある。ここで透過型の E C B 型液晶表示装置の場合、一方の偏光板を透過して入射した直線偏光が、液晶セルを透過する過程で液晶層の複屈折作用により、各波長光がそれぞれ偏光状態の異なる楕円偏光となった光となり、その光が他方の偏光板に入射して、この他方の偏光板を透過した光が、その光を構成する各波長光の光強度の比に応じた色の着色光になる。

【 0 0 0 8 】

すなわち、上記 E C B 型液晶表示素子は、カラーフィルタを用いずに、液晶セルの液晶層の複屈折作用と少なくとも一枚の偏光板の偏光作用とを利用して光を着色するものであり、したがってカラーフィルタによる光の吸収がないから、光

の透過率を高くして明るいカラー表示を得ることができる。

【0 0 0 9】

しかも、上記 E C B 型液晶表示素子は、液晶セルの両基板の電極間に印加される電圧に応じた液晶分子の配向状態によって液晶層の複屈折性が変化し、それに応じて他方の偏光板に入射する各波長光の偏光状態が変化するため、液晶セルへの印加電圧を制御することによって上記着色光の色を変化させることができ、したがって、同じ画素で複数の色を表示することができる。

【0 0 1 0】

図 1 は、クロスニコル下におい前記透過型 E C B 型表示素子を駆動した場合における、リタデーション量とそれに対応する色を示した図である。この図に示す通り、複屈折量に応じて色が変わっていく様子がわかる。ここで使用する液晶モードとして、例えば電圧無印加時に垂直配向している誘電率異方性 ($\Delta \epsilon$ と表す) が負の材料を使用した場合、電圧無印加時には黒表示されており、電圧の増加に応じて、黒→グレー→白→黄色→赤→紫→青→黄色→紫→水色→緑といったように色が変わることになる。

【0 0 1 1】

【発明が解決しようとする課題】

しかしながら、上述したような E C B 型液晶表示素子は、カラー表示可能ではあるものの、例えばクロスニコル下における透過型表示素子として用いた場合に、緑を表示するためには図 1 に示した通り 1 3 0 0 nm のリタデーション量が必要となる。したがって、従来の液晶表示素子と比較するとかなり大きなセル厚が必要となっていた。

【0 0 1 2】

例えば電圧無印加状態に垂直配向しているモードは、V A (V i r t i c a l A l i g n m e n t) モードとして商品化されているが、その商品ではリタデーション量が 2 0 0 ~ 2 5 0 nm 程度に設定されていることから、E C B 型液晶表示素子でカラー表示するためには同じ液晶材料を用いた場合には、セル厚を約 6 倍に設定する必要がある。すなわち現在の V A モードを用いた製品のセル厚が 4 ~ 5 ミクロンだとすると、E C B モードでは 2 0 ~ 3 0 ミクロンのセル厚が必

要ということになる。

【0013】

このような大きなセル厚を採用しようとする場合、例えばセル厚を正確に出すために一般に用いられている球状スペーサーを使用すると、画素に対してスペーサーの占める面積がかなり大きくなってしまい、結果的に開口率が減少するのと等価になってしまう。したがって元来明るい表示を得ようとするために ECB 方式を採用したいのだが、開口率の減少によってその効果が半減してしまう。

【0014】

また大きなセル厚を採用しようとする場合、応答速度の問題が発生する。一般に応答速度はセル厚の自乗に反比例（応答時間がセル厚の自乗に比例）することが知られている。したがって、セル厚が約 6 倍の場合には液晶の応答時間が 36 倍になってしまうことになる。例えば、商品化されている VA モードの液晶ディスプレイの代表的な応答時間が 20 ミリ秒程度であることから、ECB モードでは約 720 ミリ秒の応答時間になることが予測できる。つまりこれでは動画表示を行うことが出来ない。

【0015】

さらに、ECB モードでは複屈折効果を利用したカラー表示を行うことは可能であるが、カラー表示時に階調を表現することはできない。したがって限られた色数でしか表示することができなかった。

【0016】

【課題を解決するための手段】

そこで本発明は、従来の RGB カラーフィルタ方式とは異なる方式を用いて光利用効率を向上させ、セル厚の増加を抑制することで動画表示可能とし、かつ多色表示可能であるようなカラー液晶表示素子を提供することである。

【0017】

本発明は、表面に電極を備えた一对の基板を対向配置し、該基板間に液晶層を有し、かつ該基板の外側に少なくとも 1 枚の偏光板を有した液晶表示素子であって、

該液晶表示素子の一つの画素は複数の副画素からなっており、

前記複数の副画素の少なくとも一つは、液晶層の配列変化によるリタデーション変化に応じたカラー表示を行う事ができる副画素 1 と、カラーフィルタ層を有した副画素 2 からなることを特徴とするカラー液晶表示素子である。

【 0 0 1 8 】

また本発明は、前記副画素 1 の表示色は点灯または非点灯の表示色であり、前記副画素 2 の表示色は印加電圧値に応じた連続階調色であることを特徴とするカラー液晶表示素子の駆動方法である。

【 0 0 1 9 】

また本発明は、前記副画素 1 および副画素 2 の表示色は印加電圧値に応じた連続階調色であることを特徴とするカラー液晶表示素子であり、前記副画素 2 に使用するカラーフィルタが緑色であることを特徴とする。

【 0 0 2 0 】

また、色純度よりも明るさを求める場合は、前記副画素 1 はカラーフィルタを有さない場合も有り、有る場合には、マゼンダ色のカラーフィルタが用いられることもある。

【 0 0 2 1 】

さらに、前記副画素 1 は少なくとも異なる面積を有している複数のサブピクセルからなっているカラー液晶表示素子であって、前記サブピクセルが N 個あったとき、その面積比は $1 : 2 : \dots : 2^{N-1}$ となるよう分割されていることを特徴としている。

【 0 0 2 2 】

さらに本発明は、前記副画素 1 における液晶層と、前記副画素 2 における液晶層に対して同一の電圧値を印加したときの液晶の応答速度において、副画素 1 の応答速度よりも副画素 2 の応答速度の方が速くなるような手段を有するカラー液晶表示素子である。

【 0 0 2 3 】

また、前記副画素 1 におけるセル厚 d_1 と、前記副画素 2 におけるセル厚 d_2 とが、 $d_1 > d_2$ であることを特徴としている。

【 0 0 2 4 】

また、前記液晶表示素子の各画素の画素ピッチが 2 0 0 ミクロン以下であるカラー液晶表示素子である。

【 0 0 2 5 】

さらに本発明は、前記カラー液晶表示素子が反射型の素子であり、また少なくとも偏光板と位相補償フィルムと液晶層と反射板とからなり、該液晶層の液晶分子は電圧印加時に少なくとも光軸方向の異なる 2 つのダイレクタ方向に傾斜するように制御され、該光軸方向の異なる各々の液晶層には異なる電圧値を与えて駆動することを特徴とした反射型カラー液晶表示素子の駆動方法である。

【 0 0 2 6 】

【発明の実施の形態】

以下、図 2 乃至図 4 を参照して、本発明の実施の形態について説明する。

【 0 0 2 7 】

まず、本実施の形態にて製造され駆動される液晶表示素子の表示原理について図 2 を参照して説明する。

【 0 0 2 8 】

本発明の液晶素子では図 2 に示すように、1 画素を複数の副画素に分割し、緑を表示させる画素には緑色のカラーフィルタを用いていることが特徴である。

【 0 0 2 9 】

こうすることによって、カラー表示する際にも緑画素に対しては E C B による着色を利用しなくてもよいことになる。すなわち、E C B による着色については、赤と青だけを利用すればよいことになることから、カラー表示の際に必要なリタデーション量が従来のものよりもはるかに小さくてもよいことになる。

【 0 0 3 0 】

これにより通常用いられる液晶素子と比較した時のセル厚増加分を抑制することが可能となる。例えば図 1 によると、赤はリタデーションが 4 5 0 n m であって、青はリタデーションが 6 0 0 n m である。したがって、6 0 0 n m のリタデーションを実現するためのセル厚に設定すればよいことになる。上記例で言うと、セル厚は約 1 0 ミクロンでよいことになる。つまり上記例で問題としていた応答速度の問題も 1 0 ミクロンというセル厚であれば 1 5 0 ミリ秒程度となり、若

干のボケは存在するものの動画表示が可能となるため、応用範囲が格段に広がる。またこれを反射型液晶素子に適用した場合には、セル厚が半分となるため応答速度はこの $1/4$ の 40 ミリ秒以下となり、動画表示にもほぼ問題ないことになる。

【0 0 3 1】

また緑の色再現範囲はカラーフィルタによって決まり、白色の透過率を犠牲にすることなく高い色再現性を実現することが可能となる。

【0 0 3 2】

さらに通常の ECB モードではカラー表示における階調表示が困難だったが、緑表示においては連続階調が可能となる。つまり人間の目にとって最も視感度特性の高い緑色が連続階調可能であることから、高い階調再現性を得ることができる。

【0 0 3 3】

またこのときの緑画素のセル厚は、透過型の場合 $\lambda/2$ 条件、反射型の場合には、 $\lambda/4$ 条件が表示できれば十分であるため、他の ECB による着色を用いる画素のセル厚よりも薄くすることが可能である。これにより緑の画素の応答速度を高めることが可能となっている。つまり本発明の素子に関しては、視感度特性の高い緑画素の応答速度が速くなることから、人間の目には高速で表示されるように感じる事が出来る。さらに前記例におけるカラーフィルタのない画素では、電圧印加時に ECB による着色を利用しているため、赤や青の表示は高電圧で駆動されていることになる。このことから、赤や青表示では高電圧駆動に起因する高速表示、緑表示では薄セル化による高速表示となりいずれの場合も高速表示可能であるために、応答速度の色間ばらつきを抑制することが可能となる。

【0 0 3 4】

また一般に ECB による着色を利用した表示モードでは、カラー表示は容易に出来るものの階調表示が困難という問題がある。つまり本提案の液晶素子では視感度特性の高い緑画素については連続階調表示可能であるが、青と赤は ECB による着色を利用しているため階調表示が困難である。例えば図 2 (a) に示した画素構成では透明画素部分の階調表現は困難ということである。そこで図 2 (b

）に示すように、青と赤を表示するためのサブピクセルに関しては更に複数のサブピクセルに分割し、その面積比を変えることによってデジタル的に階調を表現することが出来る。

【0035】

このとき前記サブピクセルがN個あったとき、その面積比を $1 : 2 : \dots : 2^{N-1}$ となるよう分割することで、リニアリティーの高い階調表示特性を得ることが出来る。図2（b）の例では $N=2$ としている。

【0036】

なおこのときデジタル階調であるがゆえに表現できる階調数が限られてしまうという問題がある。しかしながら、本発明の液晶素子では視感度特性の低い赤と青にのみデジタル階調を使用している。すなわち目の検知しうる階調数が少ない赤と青に限ってデジタル階調を使用することで限られた階調数でも十分な特性を持たせることが可能となる。

【0037】

なお上記のように限られた階調数でも十分な階調性を感じさせるためにも、画素ピッチは細かい方が好ましい。つまり、例えば人間が画素を識別できなくなる解像度という観点で、200ミクロンピッチ以下にしておくことがより望ましい。

【0038】

なお波長分光特性に例えば図5に示すような帯域阻止特性（緑の補色であるマゼンダ色）を持つカラーフィルタを、前記緑画素以外の画素に配設することによって色再現範囲を大幅に広げることができる。これにより、赤や青の色再現範囲が大きく広がり高品位な表示素子を得ることが可能である。

【0039】

また本発明の液晶素子は光利用効率を高いことから、高い反射率を有する反射型液晶素子に用いることが好ましい。すなわちバックライトを有する透過型液晶素子は、その応用例がテレビ用途であったりデスクトップPC用のモニタであったりするため、現状の消費電力でも実用においては十分であると考えられていることから消費電力の高い高輝度のバックライトが用いられているのに対して、光

源を持たない反射型液晶素子の反射率は現状でもまだ不十分と言わざるを得ず、依然として改良の余地を残している。このことから本発明の液晶素子は高反射率液晶素子において有効な表示モードであるということが出来る。

【 0 0 4 0 】

なおこのとき十分な視野角を得るために、配向分割による手法をとるのが一般的である。例えば透過型の V A モードでは表面に凹凸をつけたり、電極形状を工夫したりして電圧印加時の液晶分子傾斜方向を制御することで、広い視野角特性を実現している。またこのときの傾斜方向は偏光板に対して 4 5 度、1 3 5 度、2 2 5 度、3 1 5 度の 4 つの方向に傾斜するように制御することによって全方向からの視野角特性を良好なものとしている。

【 0 0 4 1 】

こうした配向分割の考え方は反射型液晶素子においても重要である。ただしこのとき透過型モードとは異なり工夫が必要となる。

【 0 0 4 2 】

本発明で用いる反射型液晶素子の構成を図 3 に示す。つまり図 3 では上から、偏光板、位相補償板、液晶層、反射板の構成としている。このときの明暗の表示が出来る原理について簡単に述べる。

【 0 0 4 3 】

まず簡単のため、液晶層は配向分割されていないものとする。さらに簡単のため用いる波長は 5 5 0 n m (単波長) のみとする。位相補償板は一軸でありそのリタデーション量は 1 3 7 . 5 n m とすし、遅相軸が (偏光板の偏光軸から見て) 時計回りに 4 5 度になるように配置されている。また液晶層は電圧無印加時に垂直配向であり、電圧印加により分子が傾斜する、いわゆる V A モードを用いて説明を行う。このときの液晶分子の傾斜方向は偏光板に対して (偏光板側の偏光軸から見て) 時計回りに 4 5 度とする。このときの様子を図 4 (a) に示す。

【 0 0 4 4 】

上記構成において、液晶層に電圧が印加されていない場合には、垂直配向であるが故に、液晶層のリタデーション値はゼロである。したがって、上記構成における反射率 T % は以下の式で表される。

【 0 0 4 5 】

$$T\% = \cos^2 (\pi \times 2 \times 137.5 / 550) \\ = 0 \quad \dots \text{(式 1)}$$

これにより、電圧無印加時の反射率はゼロ、すなわちいわゆるノーマリブラック構成ということになる。

【 0 0 4 6 】

次いで、電圧印加時について考える。

【 0 0 4 7 】

このとき電圧印加によって液晶分子は位相補償板と平行な方向に傾斜する。したがって、液晶分子の傾斜によって液晶層に発生するリタデーション量を $R(V)$ とすると、電圧印加時の反射率 $T\%(V)$ は以下の式で表される。

【 0 0 4 8 】

$$T\%(V) = \cos^2 (\pi \times 2 \times (137.5 + R(V)) / 550) \\ \dots \text{(式 2)}$$

これにより電圧に応じた所望の反射率が得られることになる。

【 0 0 4 9 】

ところで商品化されている VA モードは一般に視野角特性改善のために配向分割を行っている。ここでまず始めに上記例とは 180 度異なる方向、すなわち 225 度方向に傾斜する場合を考える。この場合には上記例と同様に液晶分子の傾斜方向は位相補償板と平行であるために得られる反射率は式 2 と同様になる。

【 0 0 5 0 】

上記のように 45 度方向と 225 度方向の 2 分割によって、左右（もしくは上下）の視野角特性は良好となる。なおここで、透過型の場合には左右（もしくは上下）の視野角特性を改善するために 2 分割が必要なのだが、反射型の場合には入射光と反射光により自己補償されるためにこうした分割は必ずしも必要ではない。

【 0 0 5 1 】

さらにここで全方向の視野角特性を良好なものとするためには、上下（もしくは左右）も改善する必要がある。そのためには上記例とは 90 度異なる方向にも

液晶分子が傾斜するように配向分割する必要がある。すなわち 1 3 5 度方向と 3 1 5 度方向（反射型の場合にはそれらのうちいずれか一方のみでも良い）に分子が傾斜するように配向分割させればよい。すなわち図 4（b）に示すような関係となるよう、配向分割すればよいことになる。

【0 0 5 2】

この場合、得られる反射率は以下の式で表される。

【0 0 5 3】

$$T\% (V) = \cos^2 (\pi \times 2 \times (137.5 - R(V)) / 550) \dots (式3)$$

つまり反射型表示素子の場合には式 2 と式 3 の違いにより、同じ電圧を印加したとしても、例えば $R(V)$ が $1/4$ 波長である場合などの特殊な場合を除けば、異なった反射率を示すことになってしまう。

【0 0 5 4】

そこで本発明の液晶素子では上記例における上下と左右のように、位相補償板とのなす方向が異なる場合にも等しい反射率を得るために、異なる電圧値を印加できるように、例えばそれぞれ独立なルックアップテーブルを用意し駆動している。つまり配向分割の方向ごとに独立に電圧印加できるような電極構成とすることにより、均一な反射率と広い視野角特性を同時に実現している。なお、このとき一つの画素を配向分割方向に応じて、例えば上下用と左右用との 2 つに分割するなど、複数のサブピクセルに分割しても良いし、特に画素ピッチが例えば 200 ミクロン以下の場合などの高精細パネルにおいては隣接する画素同士で異なる方向に傾斜するように分割しても表示上は全く問題ない。

【0 0 5 5】

上記構成により、高い透過率（もしくは反射率）、広い視野角、広い色空間を同時に満足する液晶素子を実現することが可能となる。

【0 0 5 6】

なお本発明の液晶素子の駆動には、直接駆動方式、単純マトリクス方式、アクティブマトリクス方式のいずれの方式も用いることが出来る。また本明細書で述べたように、透過型としてもよく、反射型としても良いし、もしくは半透過型と

してもよい。

【 0 0 5 7 】

また用いる基板はガラスでもよいしプラスチックなどの可とう性を有するものでも良い。また反射型にする場合には、反射板として鏡面反射板を用い液晶層の外側に散乱板を設けるような、いわゆる前方散乱板方式や、反射面の形状を工夫して指向性を設けたいわゆる指向性反射板など、各種反射板を用いることが出来る。また本明細書中では一例として垂直配向モードを例示したが、他にも平行配向モード、HAN型モード、OCBモードなど電圧印加によるリタデーション変化を利用するモードであればいずれのモードにも適用することが可能である。また本発明の本質は大きいリタデーション量を必要とする表示色に対してのみ、カラーフィルタを適用するということであるから、STNモードなどにも適用することが可能である。

【 0 0 5 8 】

【実施例】

以下実施例を用いて本発明を詳細に説明する。

【 0 0 5 9 】

(共通素子構成)

実施例に用いる共通の素子構造として下記のものを用いた。

【 0 0 6 0 】

液晶層の構造として、基本的な構成は図3に示す構成と同様なものとし、垂直配向処理を施した2枚のガラス基板を重ね合わせセル化し、液晶材料として誘電率異方性 $\Delta\epsilon$ が負である液晶材料(メルク社製、型名MLC-6608)を注入した。なおこのとき実施例に応じてリタデーションが最適となるようにセル厚を変化させた。

【 0 0 6 1 】

用いる基板構造として一方の基板にTFTが配置されたアクティブマトリクス基板を用い、もう一方の基板にはカラーフィルタが配置された基板を用いた。このときの画素形状やカラーフィルタ構成は実施例に応じて変化させた。

【 0 0 6 2 】

T F T 側の画素電極にはアルミ電極を用い、反射型の構成とした。

【 0 0 6 3 】

また上基板（カラーフィルタ基板）と偏光板との間には広帯域 $\lambda/4$ 板（可視光領域で $1/4$ 波長条件をほぼ満たすことができる位相補償板）を配置した。これにより電圧無印加時には暗状態となり、電圧印加時には明状態となるようなノーマリブラック構成とした。

【 0 0 6 4 】

（実施例 1）

薄膜トランジスタ付きのアクティブマトリクス基板で、対角 1 2 インチ（画素数 $800 \times 600 \times 3$ ）の画素を有する基板を用いた。

【 0 0 6 5 】

またカラーフィルタとして通常 T F T / L C D パネルに用いられている赤・緑・青の 3 原色タイプのものを用いた。

【 0 0 6 6 】

液晶層のリタデーションについては、 ± 5 V 電圧印加時の反射分光特性の中心波長が 5 5 0 nm とするために、 ± 5 V 電圧印加時のリタデーション量が 1 3 8 nm となるよう、セル厚を 3 ミクロンに調整した。

【 0 0 6 7 】

なおこのとき電圧印加時の液晶分子の傾斜方向は、パネル上面の偏光板側から見て、全面が時計回りに 4 5 度となる方向に傾斜するように垂直配向処理の際に、基板法線から 1 度程度のプレチルト角を付与した。

【 0 0 6 8 】

このような液晶素子について、電圧を様々に変化させることによって画像を表示させたところ、R G B それぞれの画素について印加電圧に応じた連続階調色が得られ、それによってフルカラー表示可能であることを確認した。またこの素子の反射率は 1 6 % だった。

【 0 0 6 9 】

（実施例 2）

アクティブマトリクス基板として、実施例 1 と同じ基板を用いた。

【0070】

カラーフィルタとして明細書中で述べたように緑だけを用いて、残る2画素は透明とした。また明細書中で述べたように、この残る2画素については面積比を1:2とした。

【0071】

液晶層のリタデーションについては、赤表示と青表示ができるように、透明画素の±5V電圧印加時のリタデーション量が300nmとなるようセル厚を7ミクロンに調整した。緑画素の条件については実施例1と同様とした。

【0072】

このような液晶素子について、電圧を変化させることによって画像を表示させたところ、緑のカラーフィルタを有する画素に関しては、印加電圧値に応じた透過率変化を示しており、完全な連続階調特性が得られることを確認した。

【0073】

一方緑のカラーフィルタを有さない他の画素に関しては、5V印加時には青色、4.2V印加時には赤色表示となり、本実施例の液晶パネルが三原色表示可能であることを確認した。さらに3V以下の領域では印加電圧の大きさに応じた連続階調表示を確認した。

【0074】

さらに赤と青に関しては、表示させる副画素を変化させることによって面積階調特性が実現できることを確認した。しかしながら、その階調量が4階調しかないので自然画を表示させた際に若干ざらつき感の残る画像となっていた。

【0075】

なおこの素子の反射率は33%であり、実施例1と比較して2倍の値となり、かなり明るい白表示が得られていた。

【0076】

(実施例3)

アクティブマトリクス基板として、対角3.5インチ(画素数800×600×3)の画素を有する基板を用いたほかは、実施例2と同様の条件でセルを作製した。

【0 0 7 7】

その結果、カラー表示能については実施例 2 と同様に良好な特性が得られることを確認した。さらに本実施例では画素ピッチがかなり細くなり、高精細化したことによって自然画を表示させた場合でも目視では全くざらつき感を感じない連続階調を表現できた。

【0 0 7 8】

またこの素子の反射率は 3 3 % であり、実施例 1 と比較してかなり明るい白表示が得られていた。

【0 0 7 9】

(実施例 4)

アクティブマトリクス基板として、先の実施例 1 と同じ基板を用い、実施例 3 における透明画素のかわりに、図 5 に示す透過分光特性を示すカラーフィルタ（富士フイルムアーチ社製、型名 CM-S571）を設けた画素構造を採用した。

【0 0 8 0】

その結果、実施例 3 と同様に自然画を表示させた場合でも、目視では全くざらつき感を感じない連続階調を表現できた。

【0 0 8 1】

またこの素子の反射率は 2 8 % であり、実施例 3 と比較すると若干劣るものの、実施例 1 と比較するとかなり明るい白表示が得られていた。またこの実施例におけるカラー表示では、色度座標上において実施例 3 と比べて大きく色再現範囲が広がっていることが確認できた。

(実施例 5)

実施例 1 について、液晶分子の傾斜方向を反時計回りに 4 5 度の方向に傾斜するように、基板法線に対してプレチルト角を 1 度付与した。その結果、最大反射率を得るための電圧値はほぼ実施例 1 と同様であったものの、電圧—反射率特性（ガンマ特性）が実施例 1 と異なる事を確認した。

【0 0 8 2】

この結果から、視野角特性改善のために配向分割する場合には、同じ反射率を得る場合でも傾斜方向に応じて印加電圧値を変化させる必要があることを確認し

た。

【0 0 8 3】

(実施例 6)

実施例 3 の構成とセル厚以外を同じ構成とした液晶セルを用いた。このときのセル厚は透明画素、緑画素ともに 7 ミクロンとした。また緑画素に印加する最大電圧値を $\pm 3 \text{ V}$ として、実施例 3 と同様に緑画素における最大リタデーション量を 138 nm とした。

【0 0 8 4】

その結果、表示品質は実施例 3 と同様に明るい表示と滑らかな階調性が得られていた。ただし、緑画素の応答速度が遅くなってしまい、動画表示時の表示ボケが多く感じられた。これにより緑画素のセル厚が薄い方が、動画表示特性が良いことを確認した。

【0 0 8 5】

以上述べたように、本実施例によって明るい反射型液晶素子を実現可能となる。なお、本実施例中では反射型液晶素子を中心に述べたが、これを透過型液晶素子、半透過型液晶素子に應用することは当業者にとってきわめて容易である。さらに本実施例では駆動基板として T F T を用いたが、その代わりに M I M を用いたり、単純マトリクス構造にしたりといった駆動方法の変更についても容易に可能である。

【0 0 8 6】

【発明の効果】

以上説明したように本発明によると、明るくかつ視認上フルカラー表示可能であり、視野角も広く、かつ動画も問題なく表示可能な液晶素子、中でも特に高反射率の反射型液晶素子が提供される。

【図面の簡単な説明】

【図 1】

リタデーション量が変わったときの色の変化を表す図。

【図 2】

本発明の画素構造を表す図。

【図 3】

本発明の液晶素子に用いる層構成の説明図。

【図 4】

本発明の液晶素子の配向分割の説明図。

【図 5】

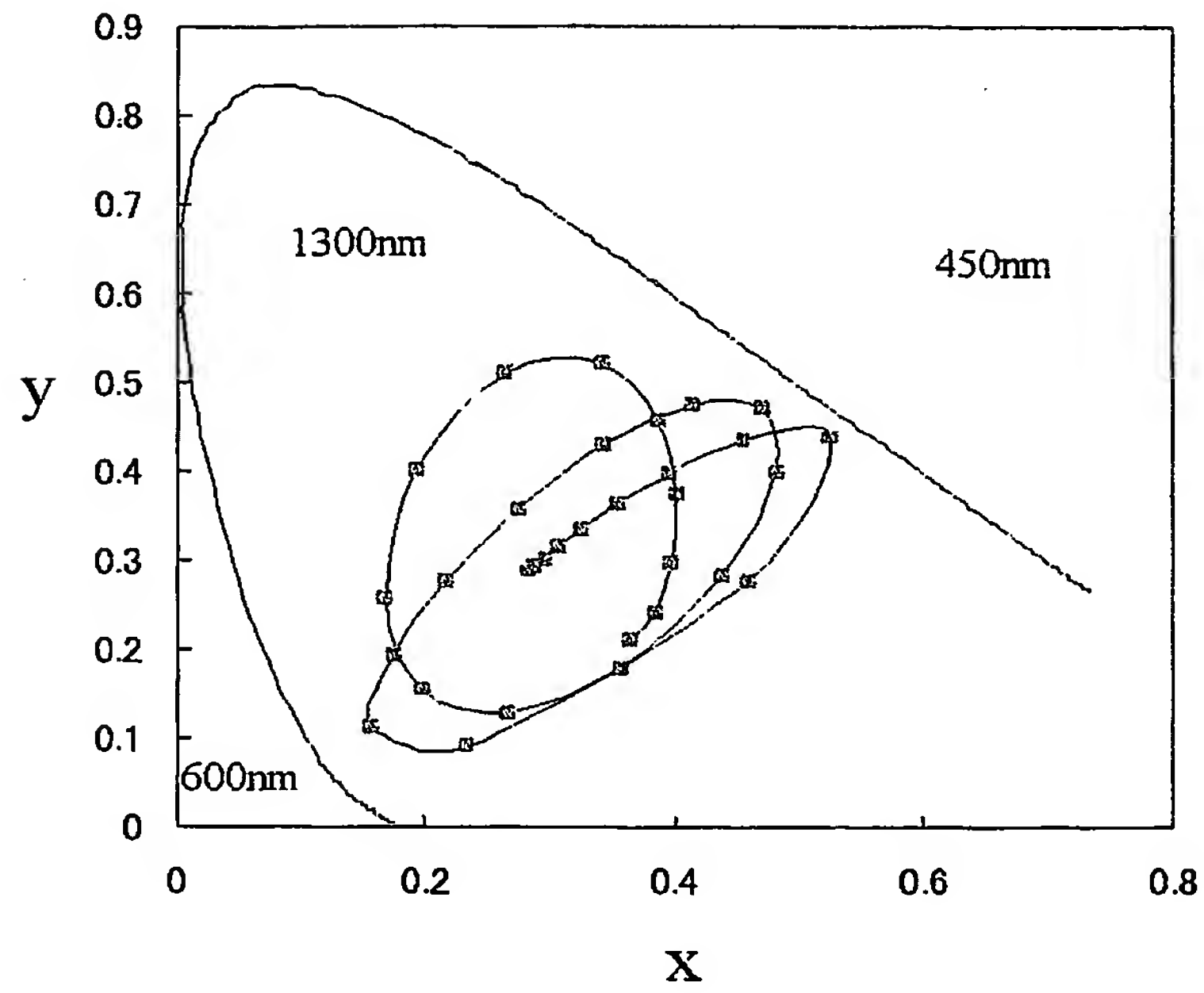
本発明の実施例に用いたマゼンダカラーフィルタの分光スペクトルを示す図。

【符号の説明】

- 1 偏光板
- 2 位相補償フィルム
- 3 ガラス
- 4 透明電極
- 5 液晶
- 6 透明電極
- 7 反射板
- 8 偏光軸
- 9 位相補償フィルムの光軸
- 10 液晶分子
- 11 液晶分子の回転面

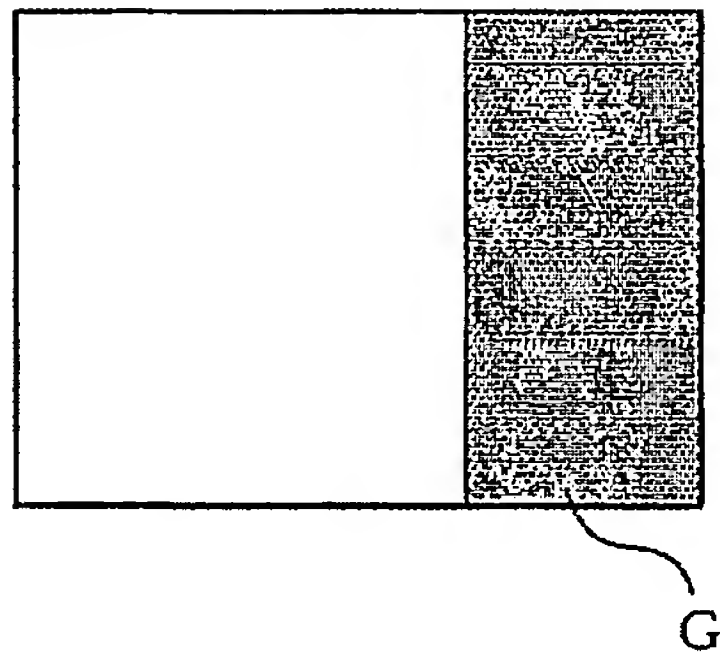
【書類名】 図面

【図 1】

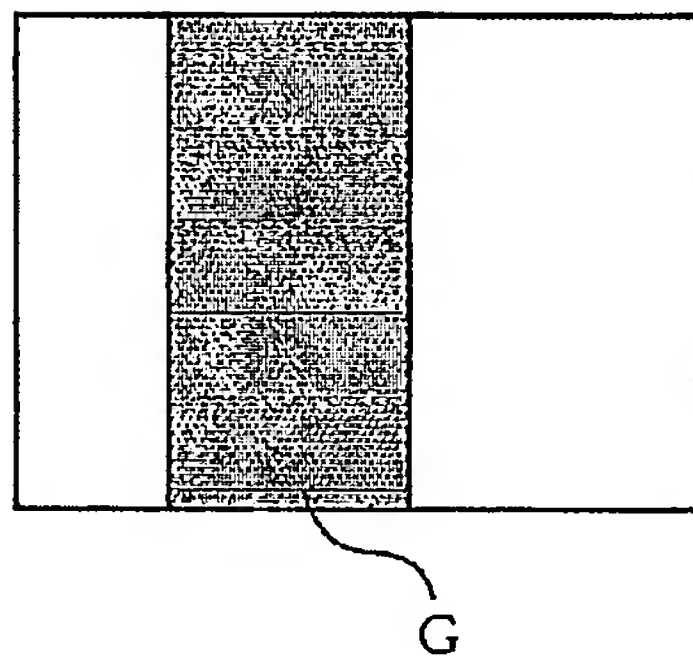


【図 2】

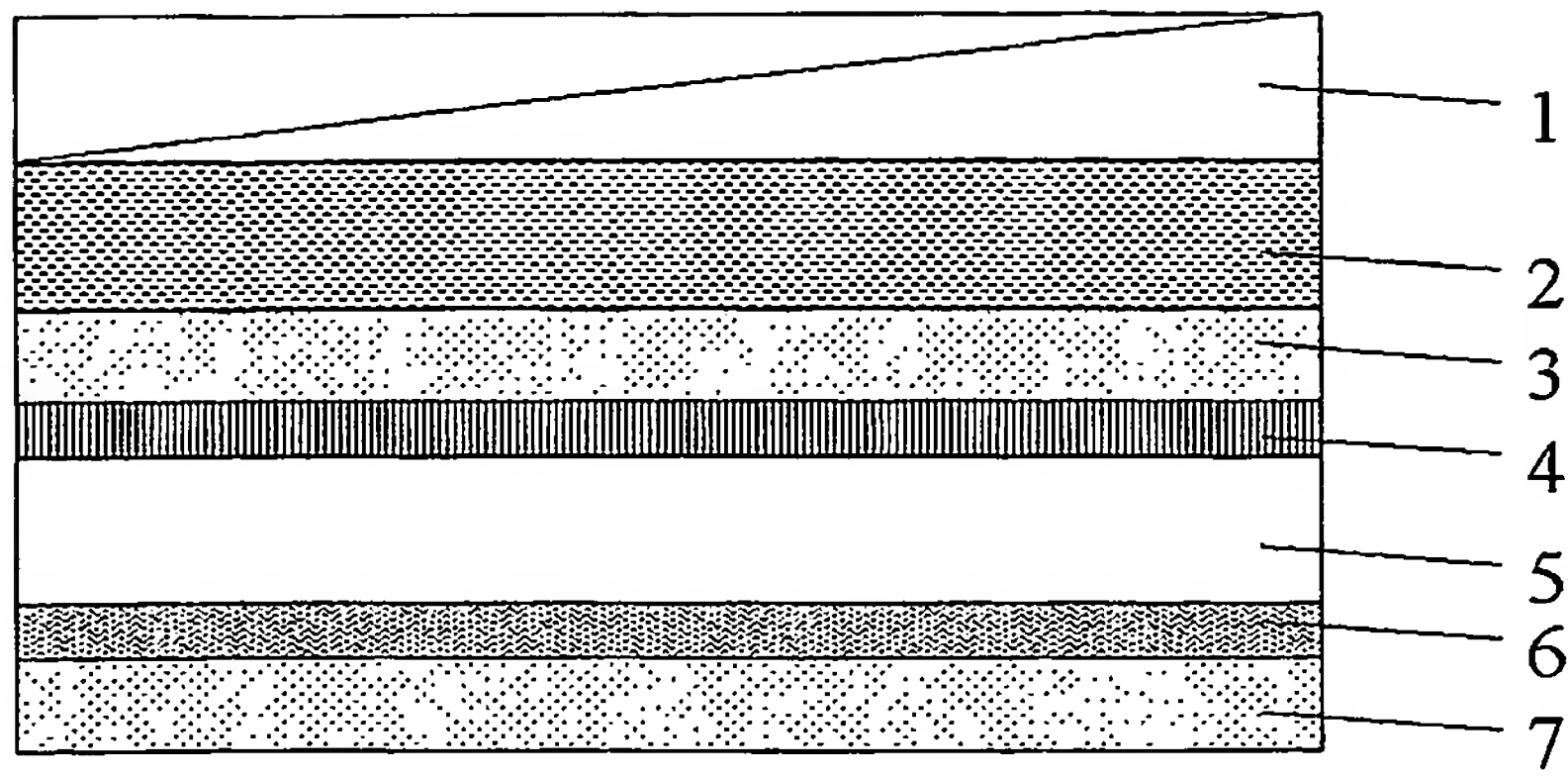
(a)



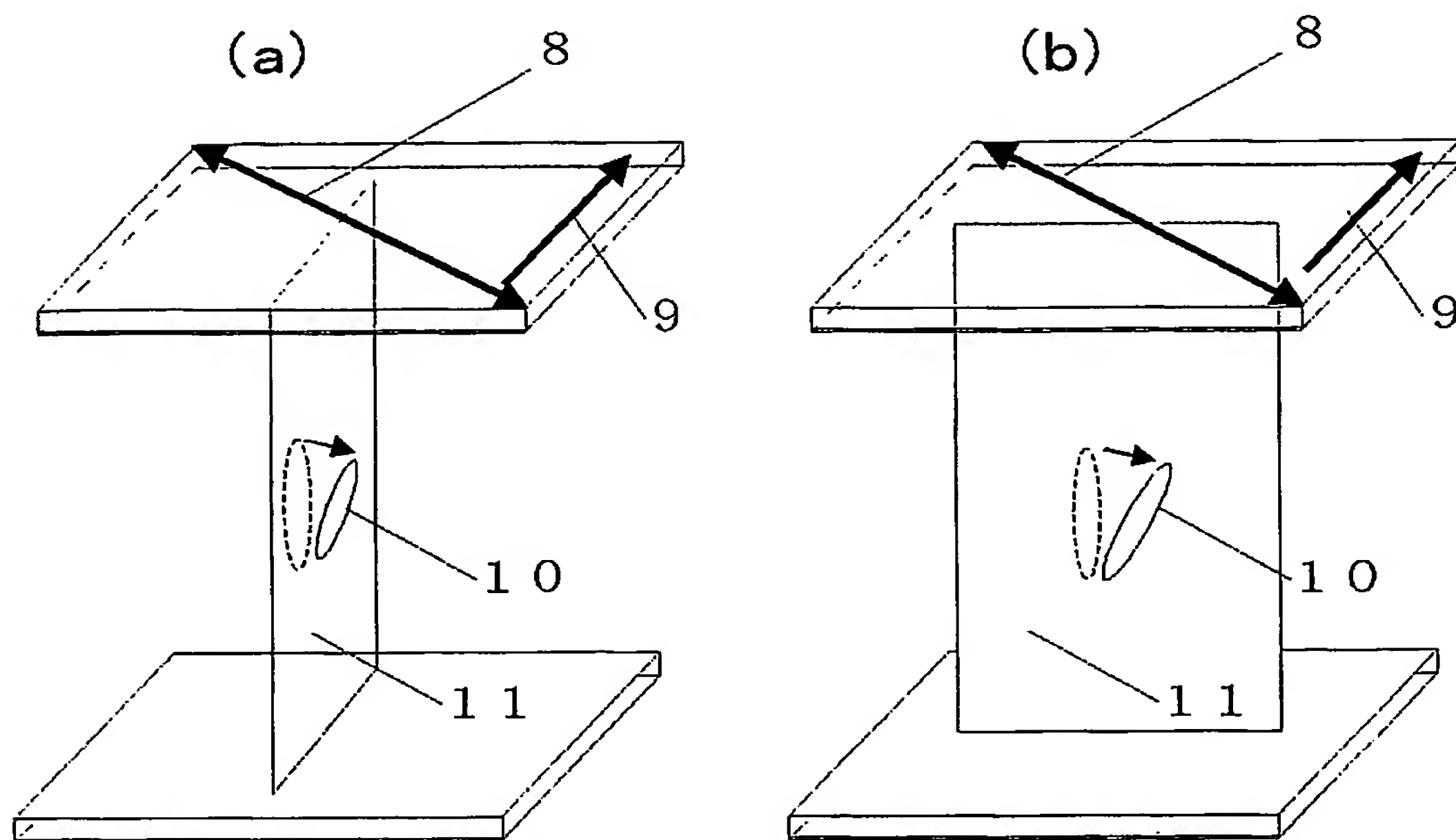
(b)



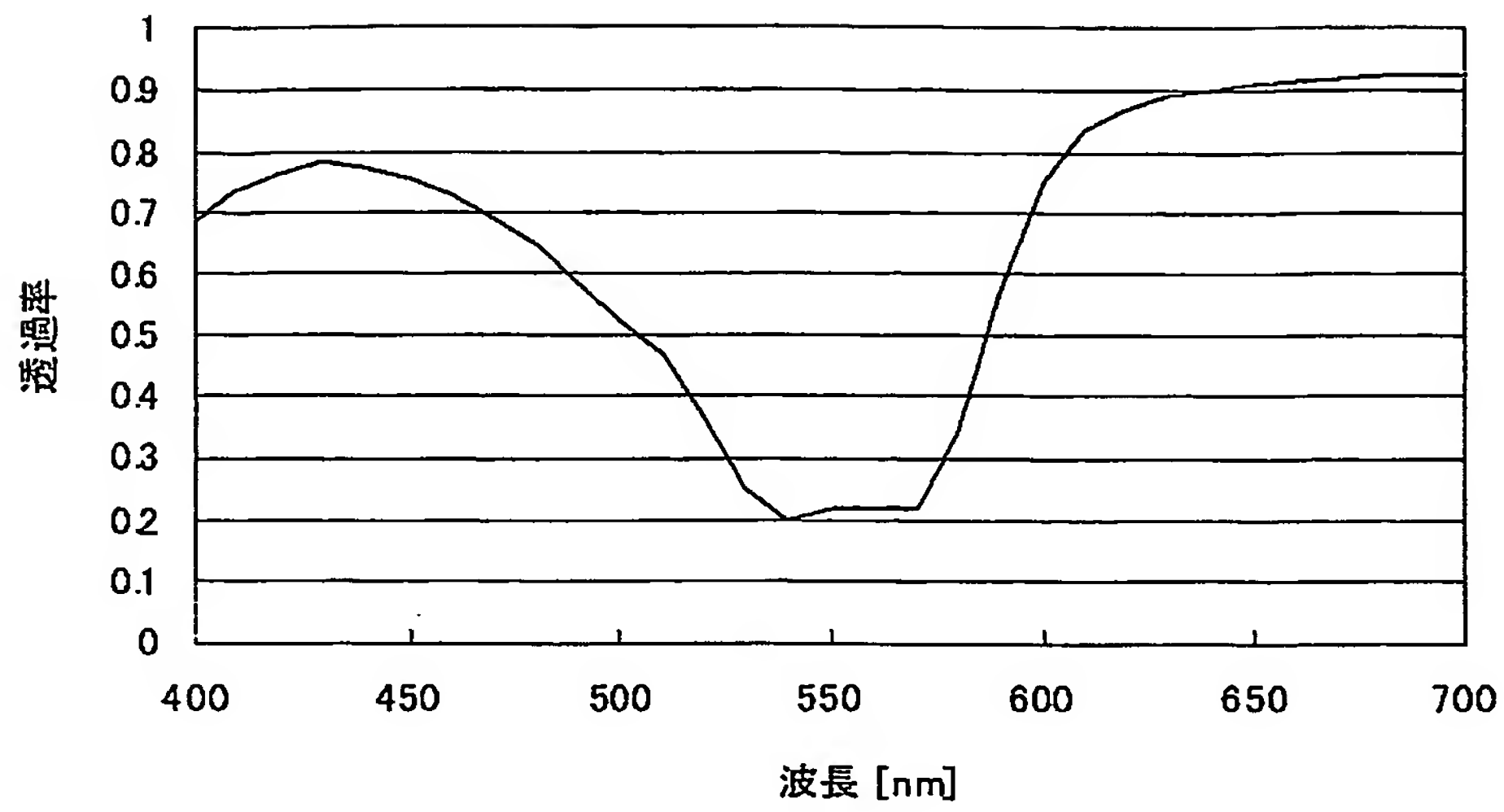
【図 3】



【図 4】



【図 5】



【書類名】 要約書

【要約】

【課題】 連続階調性、応答速度、視野角を極力犠牲にすることなく、透過率（反射率）の高いカラー液晶表示素子を実現する。

【解決手段】 緑色のカラーフィルタを用いた画素と、電界制御複屈折モード（ECBモード）による赤画素および青画素とで1画素を構成する。視感度の高い緑色でなめらかな中間調を表示でき、また視感度の低い赤、青はカラーフィルタを用いなくて輝度を高くできる。さらにECBによる着色を用いる画素をサブピクセルに分割することで緑表示以外の表示色においても面積階調を実現し、フルカラー特性を更に改善する。また、ECBモードによる着色を用いた画素にマゼンダカラーフィルタを用いることで色再現範囲を大幅に拡大させる。

【選択図】 図2

特願 2 0 0 2 - 3 2 2 7 2 2

出 願 人 履 歴 情 報

識別番号

[0 0 0 0 0 1 0 0 7]

1. 変更新月日

1 9 9 0 年 8 月 3 0 日

[変更新理由]

新規登録

住 所

東京都大田区下丸子 3 丁目 3 0 番 2 号

氏 名

キャノン株式会社